北九州市立石峯中学校

【学校ホームページアドレス】
www.kita9.ed.jp/ishimine-j

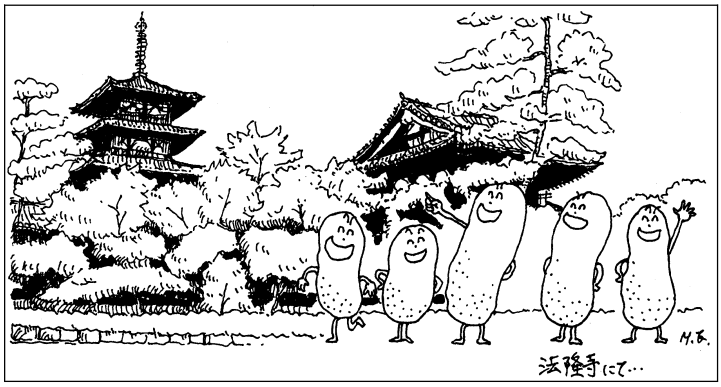
ジャガイモ

校長通信　No.５８

平成２８年　５月１０日

「 平城遷都 」

校長　江　口　　満



【修学旅行しおり巻頭言掲載】数年前、若草山に登ったことがある。標高３４２ｍの若草山の山頂から眺めた奈良のまちなみ。朝靄の中に朝日が差し、東大寺大仏殿が浮かび上がった。「奈良のまちなみには、１３００年前の姿が、まだ都の姿として残っている。」と感じた。また、猿沢池に隣接するホテルから春日大社、興福寺をジョギングしたこともある。天然記念物のシカが出迎えてくれ、「歴史・自然・動物・神仏との共生のまち」を感じた。

７１０年、飛鳥の藤原京から奈良へ都が移され、平城京が築かれた。平城京は、奈良時代の日本の首都である。現在、その平城遷都から１３０６年が経った。果たして１３００年という年月は、長いのだろうか。自分が中学生の時代であれば、全く実感のわかない年月だったろう。しかし、５０歳を過ぎてみると、今までの人生の２倍が１世紀、その１３倍だ。人生５０年間を振り返ってみても、あっという間の出来事だったような気がする。１３００年はとても長いが、ただこの長い年月を、中学生の皆さんよりも身近に感じる年齢になってしまったようだ。

若草山から眺めた奈良のまちなみ。東大寺大仏殿が間近に迫る。そして視線を遠方に移すと、宅地が途切れた一画が見える。これが平城宮跡だ。朱雀門をかろうじて眺めることができる。

平城遷都に至る半世紀は、日本が大きな危機を克服して国の再建を果たした時代だったといわれている。幕末から明治と同様に、国づくり、国防、文化の創造という総合戦略を成し遂げた象 徴が平城京だったそうだ。当時の様子が次のように記されている。

「当時の東アジアは戦乱の時代である。大化の改新を断行した中大兄皇子らが百済救援のため数万の兵を出した。だが、朝鮮半島南西部の白村江の海戦（６６３年）で唐・新羅の連合軍に大敗してしまう。４００隻が炎上し海が赤く染まったと史書はいう。敗戦の痛手は甚大で、唐・新羅の来襲を恐れる事態になった。

朝日を浴び、輝く東大寺大仏殿に思わず息をのむ。

大和政権は筑紫や壱岐などに防人を配し、国土防衛を図った。一方で政治体制の改革を進め、律令国家への歩みを急ぐ。そして新首都として完成したのが平城京だった。相次いで滅亡した百済、高句麗から亡命した王族や知識層も一翼を担った。

奈良時代は日本の歴史上、最も国際的に開かれていた時代という。僧１万人を招いて行われた東大寺の大仏開眼供養（７５２年）では、大仏に魂を迎え入れる大導師をインド僧が努め、唐、ベトナムなどの僧も重要な役割を担った。各国から多数の僧が訪れていた。新羅や渤海をはじめ各国との交流も深く、奈良はアジア・西域文化の集積地だった。

『あおによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり』国防の要、太宰府に赴任した小野老による有名

な賛歌は、都の栄華を今に伝えている。」

７１０年、平城京が奈良に築かれた後、７０年あまりの間、平城京は古代日本の都として栄えた。この都は、東西約４．３ｋｍ、南北４．８ｋｍの広さに、外京として東に東西１．６ｋｍ、南北２．４ｋｍを加えた面積を占め、平城京から南に走る朱雀大路を中心に、大路と小路によって整然と区画され、壮麗な宮殿や寺院、貴族の邸宅によって美しく彩られていた。この外京に建てられたのが、阿修羅像で有名な興福寺である。外京の外には、現在も東大寺、春日大社（７６８年創立）がある。

興福寺の五重塔と東金堂。平城遷都の際、飛鳥から移されてきた。国宝館で阿修羅像などの「秘宝」に出会うことができる。

平安京のあった京都は、豊臣秀吉の時代にまちづくりが進んだため、平安京の三条や五条などの通りの名は残っているが、平安京の大極殿として平安遷都１１００年に造られた平安神宮（１８９５年復元され、昭和５１年の火災で焼失し、３年後に再建された。）は、当時の場所とは全然違そうで、京都のまちの雰囲気のなかに平安京は基本的に残っていないとされる。

しかし、奈良のまちは、現在も、１３００年前の姿を木造都市として残こしている。都が京都に移ると、平城京の大部分は水田になった。しかし、社寺が残され、奈良は社寺の町として新しい歴史を歩み始めた。特に、興福寺や東大寺は大きな勢力を持ち続け、その周りに寺の仕事で生計を立てる人たちの住む町、門前町ができ、それがやがて今日の奈良市の旧市街に引き継がれた。

そして、明治時代に建築史家 関野貞 が田んぼの中にある小高い芝地が大極殿（第二次）の基壇であることを発見し、その後、棚田嘉十郎らが中心となって平城宮跡の保存運動が起こった。朱雀門、大極殿（第一次）は当時と全く同じ場所に復元されている。また現在、東大寺、春日大社、興福寺、春日山原始林、元興寺、薬師寺（６８０年）、唐招提寺（７５９年）、平城宮跡の８つの「古都奈良の文化財」は、ユネスコの世界遺産に登録されている。

平城京の入り口であった羅生門から平城宮の朱雀門まであった朱雀大路は、幅約７５ｍ、長さ３．７ｋｍで、現在の関西国際空港の滑走路とほぼ同じ大きさだったそうだ。最盛期の人口が約１０万人、唐をはじめ渤海・新羅、インド、東南アジアやペルシャからも外国の人がやってくる国際都市だったといわれる。奈良市文化振興条例前文に、「平城京は、世界に向けて門戸を開いた日本で最初の国際都市であり、私たちは大陸からもたらされた宗教文化や技術を、日本の伝統的な自然観と見事に融合させ、重厚な文化を育んできた。」「平城京に開花した文化は、日本の発展の 礎 となった。」と記述されている。つまり、日本は遣唐使や渡来人の人々を通して、当時、世界的な先進の中国文化、規範を取り入れた。しかし、全面的に模倣したのではなく、日本が古くから持っていた文化と上手く調和させ、独自の文化を創造していったのだ。万葉集は天皇、皇族から防人、東国の民に至る幅広い作品を集め、今も愛唱されている。伝来の漢字を用いた「万葉仮名」は、後のカタカナ、ひらがなにつながった。天平文化が日本の文化の始まりであり、天平文化が花開いた奈良が日本文化の始まりの地であると言えるのだ。

東大寺二月堂で７５２年から行われている「お水取り」、春日大社の五穀豊穣を祈って１１３６年に始められた「若宮おん祭り」は、戦争や災害があっても途絶えることなく続いている。春日大社の２０年に１回の造替も一度もとばされずに続けられている。奈良は、途絶えることなく行われてきた数多くの伝統行事をつないできた素晴らしい歴史を持ったまちである。

平城京跡のシンボル朱雀門

いよいよ５月１０日（火）、修学旅行に出発します。３年生の皆さんといっしょに、飛鳥、奈良、京都の地を訪れ、時空を超えてそれぞれの歴史文化をまるごと体験してきます。３年生の皆さんが、心を一つに、集団として一回り成長できる旅行になることを信じています。そして、思い出という素晴らしいお土産を持って帰りたいと思います。